芦高新聞

発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町55

記念祭行事日程

9月29日	P・M	前夜祭
9月30日		体育祭
10月1日	A・M	鑑賞会
	P・M	招待音楽会
10月2日	A・M	合唱コンクール
	P・M	校内音楽会
10月3・4日		文化祭
10月4日	P・M	終幕祭

ついに実現全員直接参加

合唱コンクール大会

第十一回記念祭

いよいよ明日開幕

芦高創立を記念する伝統の記念祭は今回で十一回目を迎える。祭典は今夕行なわれる前夜祭を皮切りに、全員直接参加を目標に五日間の幕を切る。今年は特に全員直接参加のため新しい趣きとして考案された〃合唱コンクール〃が盛大に行なわれることになった。期間は昨年と同様五日間ではあるが、従来の一週間制よりもさらに質の向上をめざして芦高文化の意気を結集し、かつ若人の情熱を燃やしつつ全員が有意義に過ごすように努力しよう。

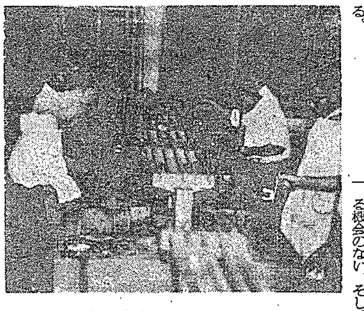
三十日開幕する記念祭に先立って本日午後から前夜祭が行なわれる。前夜祭は午後一時からの開幕式の後講堂においてコーラス部の指導により歌の練習をやり引き続いて校庭でサークル・ダンスにはいる。（器楽部によるジャズ演奏は器楽部の都合でとりやめられる）

今年は、とくに新しく全員直接参加のため考案された合唱コンクールが盛大に行なわれる。そのほか招待音楽会、文化祭と新鮮味のあるプログラムが組まれている。四日の夕四時からの終幕祭を最後に第十一回記念祭の幕を閉じる。

このたび記念祭開催費の予算不足のため一人五十円の臨時費がプログラム代も含めて徴収された。

体育祭

記念祭のトップを飾り、全員直接参加のもとで行なわれる。今年はとくに遊戯的なものを避けて高校生らしいはつらつとしたプログラム、すなわち陸上競技的なものに重点がおかれている。


記念祭の準備にほっとうしている
化学研究部

鑑賞会

日本の古典芸術の中で、日ごろわれわれ芦高生にとって鑑賞する機会のない、そして一度はぜひ見ておく必要がある狂言をこの機会に充分鑑賞できることになった。出演者は全国的に有名な茂山忠一良、茂山善三、茂山幸西郎、茂山孝夫、留川多三夫の五氏である。当日「文相撲」―「薩摩守」の二題が上演される予定である。例年は希望者だけが鑑賞していたが今回はとくに二回上演で全校生徒が鑑賞することになった。

招待音楽会

各方面と交渉した結果、ウィーン生れの貴重な存在のハープのヨセフ・モルナール氏（現在東京芸大講師、ABC交響楽団専属）、日本のチエロ界で活躍している吉田貴寿氏、ピアノ伴奏の塚本保子さん、以上三人の方を招くことに決定した。

校内音楽会

合唱コンクールの関連により今年は声楽が少なく、ハーモニカトランペットなどの器楽演奏に重点がある。

文化祭

昨年と同様今年も山岳部、地研部、化研などの研究発表が行なわれる。三日は主として劇中心のプログラムで、四日は三日と異なり合唱コンクールの優勝チーム、音楽会の有志などが劇出演者と同様出演する。展示会は現在第二期工事のため展示場所が非常に限定されているので昨年ほどの成功は修められないだろう。

合唱コンクール大会

別掲により省略する。

合唱コンクール

要綱決まる

ここ数年来の記念祭が執行委員および一部の人のものとなっており、全員直接参加という点から少なからず批判されていた。そこで何とか新企画のものをと考案した結果、昨年できた愛唱歌集に基いて、合唱コンクールを行なうことになった。そのため合唱技術のためのコンクールというのではなくて皆が全員参加して歌うことに意義がある。だから歌い方聞き方だけでなく、審査するのも先生生徒でいって盛り上りをつくりたい意向から審査員にも生徒を加えることになった。合唱コンクール委員会でも専門的な審査員を招くということについて討議したが初回でもありまた技術的な面よりもクラスの雰囲気というものに重点をおく全員直接参加の主旨よりとりやめた。本来の主旨から行けば十月二日の本選には全クラス出場すべきであるが、時間的な面、審査の面より予選をすることになった。（予選通過チーム別掲）また審査員各人の審査の基準も色々と違うので、代議員と有志の人達の構成による基準コーラスを設けることになった。

出場チーム決定

十月二日の合唱コンクールに出場するチームを決める予選が二十二、二十三、二十五日の三日間講堂で行なわれ次の十九チームが決定した。

一年―A・C・D・E・F・B六
二年―A・B・F・G・H・I六
三年―A・B・D・I・J・G六
職員チーム

書記局員決まる

増埜・広江両君

増埜君

広江君

書記局ではこのたび、記念祭をひかえて多忙になったため、自治会規約第十五条にもとずいて書記局員の増員をはかり、新実書記長より増埜市郎（1F）広江正彬（1I）の両君が七月二十四日付で任命された。

代議員会開かる

九月四日午後三時四十分から二二号室において代議員会が開かれ、恒例の第十一回記念祭行事に関する諸事項が左の通り決定した。

一、定期戦（野球・軟庭・硬庭・サッカー・陸上）を十月十日に行う予定。
一、食券は各クラスにて一人百円あたり負担する。
一、各クラスより合唱コンクール審査員一名を出す。
一、体育祭召集委員は各クラスの代議員より一名出す。

部告!!

芦笛原稿募集

二年部員募集

芦笛原稿は左記の要領で募集します。

一、各部部報＝各部の一年間の活動
一、創作品＝詩・随筆・小説・旅行記・和歌・俳句・川柳等々。
一、評論＝学校行事や国際情勢など未発表のもの。

美化委員会開く

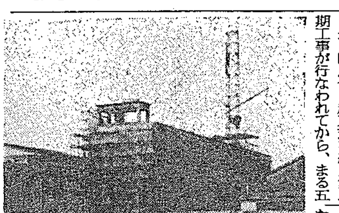
記念祭にさきがけて、九月十四日午後三時四十分より美化委員会が二三号教室において出席者二十人のもとで開かれた。左にその主な項目を掲げてみると、

一、各係の徹底（修理、掃除用具調査、掲示の各係）
二、校庭南側の草花の水かけ
三、掃除用具の不足調べ
四、文化祭の掃除当番割当てを決める。
五、生け花用の苗購入費徴集について

なお先に掲げたうち四・五はいろいろと審議されたが、決定されないうちに次回の美化委員会に持ち越されることになった。

第二期中棟校舎増築工事

ほぼ七分通りでき上がる



去る四月七日起工式を終え第二期工事が行なわれてから、まる五カ月たった。その間掘削工事など、なかなかの難工事もあったが、コンクリート工事も大部分終った。廊下の天井も張られた。九月二十八日現在、全体の十分の七できたことになる。一階、二階の竣工は今年の十一月中旬になる模様。そのうち一階は化学実験室、同準備室二室、同講義室（これは階段教室）、便所など。二階は物理実験室、同準備室、同講義室、普通教室などが設けられる。なお全階の外装は第二期工事で完成されることになっている。残りの三、四階及び地下は来年行なわれる第三期工事までお預けということになる。

このようにして来年の十一月ごろには、近代的なハイクラスの中棟が全館完成する予定である。これによって今までの移動教室制はなくなり、全クラスのHR教室ができ、すべての特別教室ができて芦高の風格も一段と高まるわけである。

堀本君帰国す

去る六月二十七日からアメリカ、ニューヨーク州のハドソン川上流のライネベックで開かれていた全世界学生キャンプに、日本代表として参加した本年度自治会長堀本良雄君が六月二日神戸港よりブラジルマルでアメリカへ出航してからはや三カ月半になる。その堀本君がアメリカでの全日程を終え九月二十四日横浜港に着いた。予定では十月初旬帰国することになっていたが、船の都合で予定より早くなったもの。

堀本君帰国の挨拶

記念祭準備の最も忙しいときを留守にしてしまい皆様に御迷惑をかけましたが、幸い記念祭に間に合って帰ることができ喜んでおります。このキャンプによって、今までの習慣や環境その他がどんなに違っていようとも、社会を構成し協同生活ができるという例と自信がわれわれの努力で示されたと思います。もっと青春の夢に忠実なもっと真剣な学生々活が送れるような機会がほしい、機会を見つけて努力せねばならないと思いました。

行事予定

9月29日	三年学力検査（国数）
30―4日	
10月5日	大掃除、補習開始
15日	大掃除
23―27日	中間考査
11月上旬	一年秋期遠足
2日	大掃除
5日	レントゲン撮影
14日	自治会役員選挙
16―17日	摂丹地区模擬考査
16日	大掃除
下旬	二年修学旅行
30日	大掃除

裏表独語

近くの草むらから心よい虫の音も聞こえてくるというきょうこのごろ。夜などは秋の気配がひとしお感じられる。さて芦高生にとって最も思い出深いものといえば毎年秋になると行なわれる記念祭であろう、その記念祭が今年も盛大に行なわれようとしている。

▼昨年一週間制から新たに五日間制となって二年目、一段と意義深いものになったように思われる。われわれは文字通り記念すべき記念祭となることを望みたい。

▼秋ともなれば食欲も旺盛になるのか、一時、工事のため行なわれていなかった食堂が再び開かれるようになると、毎日多数の大食家達がおしかけてくる。食堂係の人達は目のまわるような忙がしさである。食欲旺盛なことはわれわれにとって健康が良いということを明らかに示しているものであるから大いに結構なことであるが、あの食堂内の光景を見れば、これが芦高生であるのかと少しうんざりする。列をつくって席の奪いあい。そうかというと食べながら本を読んでいる者、それに昼休み以外は別だがあの騒がしさ。あれで食べていて味が判かっているのだろうか。最も食欲の秋という今では味など、どうでもいいのかもしれないが。それにしても、もう少し速やかに静粛にしてほしいものだ。

▼「名月を取ってくれろと泣く子かな」一茶
「名月や池をめぐりて夜もすがら」芭蕉

と仲秋の名月を見ながら古人もまた草むらでかなでる虫の音に耳を傾け、吹く秋風の中に身をただよわせていたことであろう。秋風に乗って訪れた勉学に、運動に絶好のシーズン。私達が耳によくするあの二宮金次郎の勉強態度。そして学校の門に立つ銅像をみて、果して私達の胸中に感ずるものは如何。空には人工衛生がとぶような時代の中に生きる私達だ。何も彼なみに勉強せよというのではない。少なくとも、それに値するだけの勉学をしようではないか。

論説

より立派な記念祭に

芦高生としての誇りを

二学期もはや三分の一を過ぎ、秋の訪れを感じる時候となった。記念祭も今年で十一回目を迎える。全員参加が強く叫ばれているこの近年、ついに今年初めての試みとして、執行委員会が中心となって「校内合唱コンクール」が開かれることになった。

そもそも、記念祭をより立派なものに、より楽しくなるためのもの、すなわち記念祭の本質というものは全員が参加することにある。参加というのは、単に展示会、その他を見て回ること、もしくは当日に登校しておればよいというのではない。それでは記念祭の趣旨に反する。すなわち記念祭が終ってから「やってよかった」という感想がお互いの間で出るような過ごし方をしてこそ真の参加したことになるのだと思う。また記念祭は、芦高一年間の行事の中で最も大きなものなので、よくいわれる〃記念祭ボケ〃にならないように、最も立派に楽しく送ろうではないか。

× × ×

今年も去年と同じく二年生が十一月の下旬に九州へ待望の修学旅行に出かける。

なにしろ四泊五日という短い日程で九州各地を見て回るのだから、とかく規律が乱れがちである。しかし、個人々々が自重して行動すれば規律正しくすることぐらいわけないことであろう。修学旅行は団体行動であるから、その中の数人否一人でもみんなの雰囲気を乱すような者がいたとしたら、その旅行は全くつまらないものとなり、後々までもいやな思い出として残るであろう。

修学旅行シーズンの昔、高校生その他の修学旅行生が、駅頭で窃盗を働いたとか、車中で大声で話したり、トランジスターの音を大きくして、他の旅客や通行く人に迷惑になるようなことが非常に多いのが現実の修学旅行生の実態のようである。もちろん、全部が全部そのようなことをしたわけではないが、一部にそのような規律を乱すような者がいると、その学校全体の人達が、悪い生徒、いけない学校という印象を一般の人々に与えることになる。その反面、旅行先における修学旅行生の善行は、マスコミで伝えられ世論のほほえましい一コマとなることが少なくない。

旅行する芦高生は常に〃芦高生としての誇り〃を持って芦高生らしい行動をしてほしいものだ。

この旅行が本当に有意義に、いつまでも楽しい思い出として心に残るものになるようになることが望ましい。

記念祭のおもいで

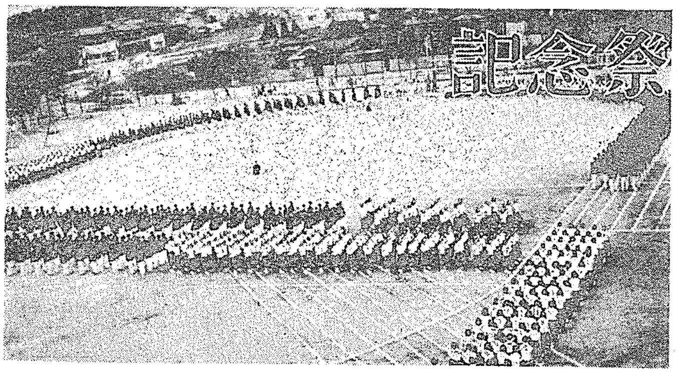
明日はいよいよ待望の第十一回記念祭の開幕である。しかし記念祭については、芦高新聞の紙上はもとより各方面ですべてのことが語りつくされた感がある。

そこで本号では趣きをかえて、先輩の方々に過ぎ去った記念祭の数々の思い出を語っていただくことにした。今も心に残るあの時、楽しかったこと、つらかったこと……。先輩達は記念祭にどのような意義を感じ、喜びを味わったのであろうか。

年代は変っても、芦高生の心に通う感激には多くの共通点もあろう。まったく異なる感情もあるかも知れない。

ここに語られた思い出の中から、かつての芦高生の姿を求めることも決して無駄ではないと思う。

× × ×



最善の努力・苦心の結晶

十三回生　望月雍平

それぞれの学校には必ず自慢の種があるものです。東大入学者数がそうである学校もあれば、母校芦高のごとく野球と記念祭というところもあります。実際この記念祭はユニーク過ぎるほどユニークなものです。しかも幸運にも（?）三年間一週間制を味わい、それがわれわれとともに卒業してしまったのです。多分一年生諸君は一体何を一週間もしたのか知らないと思うので簡単に紹介すると、まず前夜祭に始まり、体育・弁論・音楽・講演・映画・文化・展示会が続き終幕祭のトランペットのフィナーレで火嵐の火も消され、熱病がなおったように終るのでした。その一つ一つは高校生としての最善の努力、苦心が局外者にもはっきり感じられました。各部の予算もほとんどこれに注がれるということでした。記念祭の楽しみの一つに毎年音楽会に誰を呼ぶかということでこれ一つでも充分価値はありました。（アンケートには「ダークダックスを呼べ」などと不埒なことを書きましたが）これは遺伝的音痴の僕にもむずかしい音楽が何となくわかったような気がしました。サークルダンスも楽しいものでした。しかし三年間何度かやり、そのたびに忘れました。次に珍らしい話を……。去年の記念祭中のことでした。その楽しさが忘れられず（?）友達とノコノコ出かけて行ったのですが、そこで旧友と逢いカレーの券を一枚もらいました。ところが口は二つ、そこで食堂でウドン二つをかわりに持って来てほしいと言ったのですが、なかなか持って来ない。やがてウェイトレス嬢、おもむろに一皿のカレーを二皿に（もちろん福神漬も）わけて持って来たのです。賢明な諸君にはその食い違いがおわかりでしょう。僕らはあっけにとられ、次に彼女がその番でした。しかし、そのサービス精神に感服しながらもオママゴトのようにションボリしているカレーを見、しかも食べるのだと思うと……。諸君、一皿のカレーは二皿にして売ってくれます。しかし飯が肺に入らぬよう御用心！

仮装行列

十四回生　M・N

数日前、下校中の芦高生に出会いました。それも夜十時、も少し過ぎていたと思う。彼らは疲れた足どりだったけれど、一人一人には何か希望に満ちあふれたものが見えた。電柱には月の光に照らされて記念祭のポスターが……。

「サークルダンスに始まり、ファイアーストームに終る一週間、体育祭、音楽会、文化祭準備で夜のふけるのを忘れてしまい、仮装行列で真っ黒になり風呂へ飛びこんだのも……」走馬灯のように頭をめぐって、しばらくはポスターから離れることができなかった。今年ももはや記念祭とのこと。

想い出を書けといわれても、卒業して一年も経っていないいま、すべてが想い出で紙面がいくらあっても書き尽くせないほどである。ここに想い出とはいえないが頭に浮かんだものを書くことにしよう。

体育祭の仮装行列の準備中のこと。出しものは〝土人と探険隊〟準備をはじめてからは、神聖な（?）教室も大工の仕事場に早変りで、新しい教室もそのおもかげがなくなるほどでした。ちょうど校舎が新しかったせいもあって先生方の巡回がはげしく、ついにI先生に大目玉を食いました。その時の気持というものは加害者にしか分らないと思います。〝いまに見ておれ〟と。

いよいよ本番、日ごろの恩師（探険隊）も数分にして生徒（土人）にやられるという一幕でした。

〝さあすんだぞ〟バケツと雑布机上はもちろん、床のふき掃除まで、本番より力が入っていたように思える。結果は二位に入賞。あとで、石田先生にほめられたときはてれくさかったけれどもほんとうにうれしかったものです。

だらだらと書きましたが、明日から五日間、思う存分青春を楽しんで下さい。

徹夜も楽しい思い出に

十三回生　副島啓義

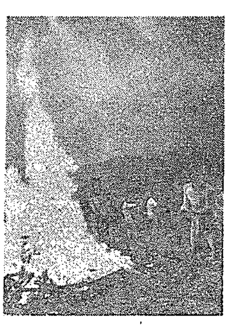
僕の記念祭経験というと七、八九回であるが、やはり三年のときの第九回が一番印象深い。まず準備段階では、今の三年生は覚えていることと思うが、正門の「第九回芦高記念祭」〝ANNIVERSARY〟の大デコレーション（や入退場門などの製作で、この仕事は一年、二年と経験を積んできていたので失敗するのも慣れた手つきであったが、何しろ協力者がわずか二、三名、多くて数名、時には僕一人のときもあって一枚一坪（いや3.3m²）の畳板八枚を動かすにも一苦労であった。毎年のように記念祭当日までにでき上がらないようなことのないように、夏休み中に完成するつもりでいたのが二学期になってみると、今度は作るのが早過ぎたせいか、せっかくでき上がっていたのにベニヤ板が雨にぬれてはがれてしまい、結局作り直して、記念祭前夜暗い中で、まだ乾いていないペンキを顔にまでつけて備えつけたのを覚えている。一方記念祭展示会では、そのとき初めての試みとして行なわれたユーモアクラブが自分もその準備に携わったせいもあって一番よかった。ただの土にワラ縄を置いて「沖縄の土」ハエを箱に入れて「危険！死の灰」といった類のものや、レントゲン室と称してカーテンで仕切った薄暗い所に女生徒を一人ずつ立たせて、スイッチを入れると前面の映像幕に全身の骨格が映って「キャーッ」といわせたり（種をあかせば幕の裏に生物教室から借りた人骨模型を置いて影をうつす）ユーモア食堂の定食には〝ねずみの丸焼〟と〝文鳥の卵〟——さすがの芦高の強者もねずみは好物ではないてみえて残っていたが、文鳥の卵の方は召上がった?らしくなくなっていた。その他〝ミス、ミスター芦高〟と書いた箱を開く[illegible]があって自分の顔が映る……。思い出すと次々ときりがないので、[illegible]めるが、三日間同じ展示では[illegible]らないだろうというので、徹[illegible]て模様替えしたのも、あの時[illegible]らこそできたこととして懐[illegible]い出である。

心に残る炎とファンファーレ

十三回生　大井祥子

〝詩人ダンテの情熱が〟芦高を卒業してからも記念祭を思い出す度に、自然と口ずさまれるこの記念祭歌。二年を経た今、すべてが楽しくすばらしかったように思われます。がなんと言っても、文化関係の一つに席を置いていた私には、その研究成果を見ていただく展示会に関する思い出が一番大きいようです。記念祭の行事そのもの以上に連日夜おそくまでささやかな研究を続け、一つの製品の完成に全力・全神経を集中させていたあの時の幸福感は、今なおはっきり記憶されております。薬品と製造過程における発生物の独得の匂いの中で……。

さて、特定個人のみの思い出としかならないことを除けば、そうです、第八回記念祭での京都交響楽団、あるいは九回の辻久子さん等のすばらしい演奏は、音楽をさほど知らない私にも本当の音楽の良さを教えてくれました。弁論大会、講演会、映画会、文化祭、それぞれ、あんなこともあった、こんなこともあったと、こうしてペンを取っていても後から後から思い出されて来ます。そして、記念祭の最後を飾る終幕祭の最も印象深い瞬間、赤々と燃えていた炎がだんだん弱くなり腕をとりあっていた芦高生の最後の声が終る頃、屋上のトランペットが静かにその終りを告げてくれ、記念祭の本当の成功を願って終始努力して来た人々の心境を思いつつ散ってゆく人々の影を、サーチライトがぼんやり照らしているその時、しまいきれない多くの思い出とともに、本当に記念祭は終っていました。またぐって来た第十一回記念祭どうか立派な記念祭でありますように……。



（終幕祭のファイヤーストーム）

就職戦線中間展望

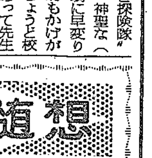
笑いとまらぬ就職希望者

就職課　丸茂先生

就職戦線中間展望についてということであるが、実の所就職戦線も一挙に終盤戦の追込みに突入しているのである。というのは今年の採用試験は八月十五日より殆ど一斉詮考となったため、八月下旬にはすでに大勢が決しているのである。本校の就職希望者は男子十九名、女子七十八名、合計九十七名中八月下旬までに採用内定となった者男子十名、女子六十名、計七十名である。しかも殆どがいわゆる一流会社に内定となり平均給与も一万円というのであるから、生徒も係教官も正に笑いが止まらぬというわけである。今年は初の一斉詮考であるから求人がどういう風にやって来るか全然予想が立たず、初めの予想では八月十五日から二十五日迄の十日間に一流所が五十社程度だろうと思っていたところ、殆ど全部の一流会社がこの時期に繰り上ってきて八十五社になった。これらの一発試験に推薦をどういう風にやるかという点に最も頭を痛めたのであるが、七月以来一カ月余、生徒との個人面接を幾度も重ね、練りに練って八月上旬に八十五社中六十社に対し応募申込を決定した。辞退二十五社中には従来卒業生採用の所も多く申訳ない思いであった。所で当所の合否予想では例年の経験から四十名は確実、うまく行って四十五名から五十名と見込んでいたのであるが蓋をあけて見ると七十名という驚異的な結果を得た。この原因は色々あるが、まず生徒諸君が非常に頑張ったこと、就職課の推薦が適切効果的であったこと、また各職場にある先輩諸君が大変よくやっていて芦高の信用を高揚していることによるのである。なおまた今夏猛暑中を夏休みを返上して毎日奮闘された係教官の非常な苦労にも深い感謝を忘れてはならない。不幸にして失敗された者も全く不運によるもので、その後続々と求人が殺到し百七十社以上に達している。従って機会は十二分にあるわけだから今後の奮闘と成功を期待しているが、おそらく十月中には全員就職決定と予想している。

なお合格者も驕ることなく今後とも一層身心の鍛錬と勉学に努力するよう希望します。

教壇随想



時代の流れに驚き

寿賀　正

私の教えていただいた先生方にもいろいろのタイプの方があったと今しみじみと思い返します。一寸時計を見ただけでピンタを下さる方、最近の統計によればと言われて日進月歩の化学工業の講義に二十年前のを示される方、質問するとそんなこと知っとればこんな所におるものかと威張られる方、教科書一冊一年分を二カ月で片づけられる人、三分の一で一年間を過す方等々、顔が異なるにつけ教え方も種々で善きにつけ、悪しきにつけ何かの影響を受けました。私の歩き方が某先生の真似だといわれて今更ながら気のついたこともありました。級友は四十名入って三十二人卒業したのですがカンニングの名人、時間中に弁当を食べる名人もいて多士済々。今学校に勤めていろいろと参考になる事多大です。試験中隣を覗き込んでも、参考書、教科書を目の前で出して見ても何もいわない先生（その代り通知簿は必ず欠点）のぷるぷるふるえる手も今はなつかしいものです。時々職員室を眺めてみてあの先生、この先生は昔の先生のどのタイプかと考えて見たり、この生徒諸氏は同級の誰に似ているかと比較してみることもあります。そして私自身はどのタイプだろうか、どのタイプが理想的なんだろうかと思ったりして反省の材料にします。某年の運動会に級から仮装行列を出したのですが校長先生が恐い顔をされ、某先生があんたの影響だといわれ今更の如く反米的な行列を本当かいと見直したこともあります。この点しっかり努力しなければならないと痛切に思います。

教師は労働者なのだろうか、否か。これも私に釈然としない問題です。大学出の若い先生より高校新卒の方が高給も聖職故ですか。先生になるという私をしみじみ眺めていわれた言葉が「お気の毒ですなあ」。私[illegible]しくなりました。しかし、案外これが世間の評価かも知れません。とに角時代の流れには驚きです。どういう方向に流れたら良いのやら。文部省発行の「民主主義」を批判した文が本紙に載ったのはもう十年前です。今の生徒諸氏ならしても何になる[illegible]それよりもエネルギーを他に[illegible]言われるかも知れません。これも時代ですか。

（社会科教諭）

待望の国体出場

体操 森　陸競 浜崎

スポーツ

◇体操

近畿大会 七・二八・二九（伏見）

団体

個人総合 六位

平行棒 三位

吊環 二位

国体兵庫予選（香合）

団体 三位

個人総合 四位 森

吊環 一位 森

近畿総合体育大会 〃

二年の部

跳馬 三位 永田

鞍馬 二位 永田

一年の部

鞍馬 二位 伊藤

〃 二位 松原

◇柔道

近畿大会兵庫予選

二回戦 芦屋 4－1 小野工

三回戦 芦屋 3－2 神商

準々決勝芦屋2－4姫工大付高

この結果、兵庫県八十六校中ベスト八に入る。

阪神地域リーグ戦

芦屋 5－0 県伊丹

芦屋 4－2 県西

◇硬式野球

第四十一回全国高校野球選手権（兵庫県大会）

四回戦

洲本 0000000＝0

芦屋 200241X＝9

（七回コールドゲーム）

準々決勝

滝川 000001010＝2

芦屋 000000000＝0

◇サッカー

国体兵庫県予選

第三回戦

芦屋3（2－0 1－0）0関学

第四回戦

灘 1（0－0 1－0）0芦屋

浜崎君優勝

近畿総合体育大会五千米

◇陸上競技

兵庫県地域大会

千五百米 浜崎 二位

〃五千米 浜崎 一位

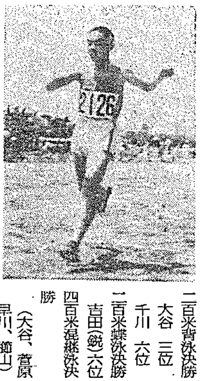
兵庫県国体予選

千五百米 浜崎 一位

五千米 浜崎 一位

百米 広田 四位

二百米 広田 四位



健闘の浜崎君ゴールイン

（本校先輩）半那・長崎組優勝

国際学生大会庭球

九月二日、イタリヤのトリノで開催された国際スポーツ大会（ユニバシアード）の庭球ダブルスに参加した本校の先輩で慶大在学中の半那選手は長崎選手と組んで優勝の金メダルを獲得した。戦績は左のとおり。

▽ダブルス準決勝

半那 長崎（慶応）（6－3 6－0 3－6 6－0）ベンタ ションボーン（チェコ）

▽同決勝

半那 長崎（6－2 6－2 3－6 6－2）ライヌン ウンテルリッヒ（西独）

◇水泳

阪神地区高校水上選手権大会（県西プール）

百米自由型決勝 櫛山 四位

二百米背泳決勝 大谷 三位

千川 六位

二百米蝶泳決勝 吉田(鋭) 六位

四百米混継泳決勝（大谷、菅原 早川、櫛山） 四位

八百米継泳（櫛山、浜田、大谷、吉田(武)） 三位

兵庫県高校水上競技選手権大会準々決勝

百米背泳 大谷B－四位

百米自由型 櫛山A－四位

県下団体長距離競泳大会

Aチーム 六位

参加三十一チーム

第二回兵庫県高校ジュニア選手権大会

百米自由型決勝

櫛山 五位（二年の部）

二百米背泳決勝

多田 六位（一年の部）

大谷 三位（二年の部）

【結果】

二年の部 県下ベスト七

総合 県下ベスト九

参加校 二十六校

◇卓球

遠征試合（豊岡高校）

男子

芦屋 5－0 豊岡実業

芦屋 5－0 豊高

芦屋 3－2 尼産

全国庭球大会

健闘空し

◇硬式庭球

全日本少年少女選手権大会 七・二七（中モズ）

単の部

二回戦

宏林（2－6 1－6）野々村（甲南）

岡本（1－6 1－6）菅（法大）

複の部

一回戦

宏林 岡本（3－6 6－3 4－6）田村 江田（慶応）

第四十九回全日本高等学校庭球選手権大会八・六（中モズ）

単の部

一回戦

岡本（6－0 7－5）勢濃（富山商）

二回戦

岡本（3－6 1－6）石川（慶応志木高）

複の部

三回戦

宏林 岡本（6－1 6－4）深野 松平（学習院）

対市立西宮高校練習試合

芦屋4－1市西

ダブルス

芦屋2－1市西

◇軟式庭球

兵庫県高校軟式庭球選手権大会（明石市営コート）

臼井・小林組

七回戦 4－1 県尼

八回戦 4－2 六甲工

準決勝 3－4 須磨

この結果、臼井・小林組は県下三位に入賞

全日本高校軟式庭球選手権大会（小田原）

一回戦

（臼井 小林）2－4 松山商（埼玉）

（清家 加古）2－4 浦和商（埼玉）

◇バレー

男子

近畿高校バレーボール

二回戦 堺商業 2－1 芦屋

阪神地区夏季トーナメント

決勝 芦屋 2－1 尼北

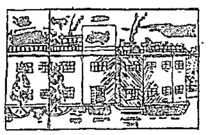
国体予選（王子コート）

四回戦 芦屋 2－1 星陵

五回戦 芦屋 0－2 県工

この結果、県下ベスト八

他校訪問



温和な落着き

市尼高校の巻

電車に乗ること二十分で「煙の都」尼崎に着いた。まこと名のとおり諸工場の煙突からもくもく湧き出る黒、白、黄の煙、天をも抜ける勢い。その中を歩くこと十分余でわれわれ部員は目的の市立尼崎高校に到着した。市尼の名は知らずとも、城内高校といえば了解される諸君も多いだろう。市尼は全日制、城内はその定時制とあいなる次第である。門を入った右手に最近改造されたばかりの体育館がわれわれに見せつけるように建っていた。正面に大正二年女学校として創立して以来じつに五十年余の校歴を誇る、黒づんだ校舎がわれわれを迎えていた。校舎内は全体として暗く相手の顔も見えない所が多くある。建築物で注目してよい物は食堂であろう。室内は明かるく、清潔である。丸テーブルを囲む楽しさも本校で味わえない所。またうどん15円と味はともかく格安である。他に品物は牛乳、ジュースなどの飲物、近々に販売されるライスを加え充実した食堂を保持している。

新聞部長の案内で文化祭の研究発表をめざし意気込む各文化部を訪問した。生研はわが校の生研＋飼研的存在であり、目下の研究課題である熱帯魚の増殖に余念がない。隣室の化研が石炭研究で悪臭を発散していた。

ちょっと落着いたところで、生徒会長と問答してみた。

▽「校風」を簡単に……

▼おとなしく、スマートな所は女学校時代の受継ぎですよ。

▽特異な存在の部は……

▼経済部というのがあったが、現在部員はいません。他に国語部、ハーモニカ部があります。生徒会に「財政委員会」というかめしいのがある。

▽男女交際は……

▼全然縁が遠いですね。今年から体育祭で男女混合競技を設け、親密さを増したいと思う。

▽生徒会への関心は……

▼足りませんね……例えば生徒会員立候補者など数える程、無投票同然ですよ。

▽目立った建築物は……

▼体育館、プール（小さいですが）

▽最後に、今後の貴校の抱負を……

▼尼崎市の全高校が集まり合同の行事、例えば研究発表会、体育祭、弁論大会などを行いないたいと思う。

▽長い間文化祭の準備にお忙がしいところすみませんでした。

帰りは市尼高校新聞部の見送りを最後に芦高と同様の「黒づんだ、あまり美しく思えない校舎」をあとに帰途についた。

文化

鉄道研究部

東京都内の私鉄見学をした。

美術部

淡路へスケッチ旅行を行なった

地理研究部

中仙道方面の地理観察のため現地旅行を実施した。

E・S・S

今井君優勝

全関西英語弁論大会

九月十九日、近大において行なわれた英文毎日、近大E・S・S主催の全関西高校英語弁論大会に出場した今井敏雄君（2・A）は見事優勝の栄冠を勝ち得た。優勝の喜びを今井君は左のように語った。

『英語弁論には去年から一年のブランクがあり、また記念祭の劇出演と重なって苦しかった。僕の弁論の演題「What I think from my own character」を読み始めたのが実考の終った日で練習期間が短かく、また当日は会場が階段教室でしゃべり始めは少し上がりました。』

視透

学校に対する希望や不満など最寄りの投書箱へどうぞ。

入館者に望む

芦高図書館は校舎と別棟なので何か図書館としての存在がはっきりしているようで誇りらしくうれしい気がする。この図書館に対して入館者である芦高生はどうであろうか。昼休みの時間、放課後などよく入っているのを見ると、図書館の活用されていることがわかる。しかし館内でのエチケットは守られないのが現状ではないだろうか。入ってすぐ右にある手洗いの使用がまったくといっていいほどない。入学のとき注意を聞いた一年生も初めの一、二回だけのことであったと思う。さて閲覧態度であるが他の図書館においての静かさはここには余りないような気がする。ボソボソ無駄話をしたり館内を歩き回ったりすることなど注意すべき点が多くある。図書館は談話室ではない。話し声は館全体をざわざわした落ち着きのないものにしてしまう。入館者各々が他人の迷惑を考えていたなら自然に静かなふん囲気になってくると思う。

（一図書部員）

食器は元へ

三時限終了のベルが鳴り終ると、もう食堂の前に列ができている。これでも生徒の食欲が旺盛であることがわかる。食堂の壁に「食器は返すこと」と書いた紙が張られているにもかかわらず返している者はごくわずかである。食器を返すことによって食堂の人達に対する感謝の気持が表われ、また狭い食堂でもスムーズに使うことができよう。

（一年T）

乱反射

▼ここかしこの窓から楽しい歌声がもれる今日今頃、記念祭の近さを身近に感じる。▼今回新設の運びとなった合唱コンクールへの激しい意気込が各クラスに満ちているためでだろう。▼執行委員会の記念祭に対する奮闘を考えれば、芦高生として文字通り一年の「記念」すべき日になるよう、「全員の直接参加」を望んでやまない。▼二年の某クラスで「ガラガラガラと大きな音がしたと思うと、大きな石がはでに飛び込んで来て、クラスの人をびっくりさせることしきり。天から石が降ってきたかと思えば、あにはからんや工事場からもれた石が三階からトタン屋根へ、そこから窓、廊下をこえて、教室に到着という次第、時にはガラスもこわれる。とんだ工事の「トバッチリ」である。▼工事の「トバッチリ」といえば、もう一つある。諸君の中には気付かれた方もいるだろうが、運動場の南側の金網がぽっかり大穴をあけている。閉められたと思うと、また開いている。安物の金網のため、もろくもこわれるはかなさか！南門が使用不能の現在無理からぬこと。南側通学者のエネルギーの節約か、遅刻組のしわざか…。▼工事のトバッチリは受けるものの、工事場でもくもく働くおっさん、いや、おじさんの玉の汗が、校舎を真の校舎らしく見えるようにしたということを考えたり、新校舎の居心地よいH・Rを考えれば、少しの不満も吹飛ぶだろう。

学研の2大コース

〔合格への最短コースへ導く最高の雑誌〕
大学入試受験コース
▶入試情報▶大学紹介▶その他受験生の必読記事満載！
毎月14日発売 60円

〔高校生の学力養成と教養雑誌〕
高校コース
▶学習特集記事▶教養▶学力養成講座▶豪華付録
毎月14日発売 100円

東京都大田区南千束町46 学習研究社 振替・東京142930

撮影部カメラ部
合資会社 芦屋写真室
国鉄芦屋駅北出口前
電話芦屋四七三六番

佐々木高政著 定価二〇〇円
英文法の要諦
断片的な英文法知識では英語を理解するのに役立たない。本書は英語を読んだり書いたりするのに直接役立つ英文法のエッセンスを独得の配列によってまとめ上げた類のない文法書である。

石谷茂著 A5四四〇頁 定価三五〇円
数I解法の新知識（代数編）
数学Iの基礎から大学受験までの実力が完全につくように…この願いは本書によって果たされている。著者が現代の数学教育の成果をすべて本書に投入した最新の数I参考書。

東京都豊島区高田南町二 平明社

信州の夜明け前

史学研究部　西川増三

「夜明け前が一番闇夜の暗いときである」と、何かの本で読んだのを憶えているが、今夏の旅行でその感を深くした。朝の早い出発で午睡に誘われるうちに、藤村のふるさとに着いた。旧中仙道をずんずん登って行くと、やがて黒い大きな門が見えてきた。午後の三時をまわっていただろう。蝉の鳴き声だけがさえわたる木曽の馬籠であった。案内所の裏にまわってみたが人影もなく、大きな日まわりが夏の午後の太陽を背いっぱいにうけてゆらりと立っており、その閑散とした中に藤村記念堂があった。土地の人が木も紙も石も全て木曽のもので作ったという、この記念堂からほんとうに「木曽の息吹き」が感じられた。行灯を擬した薄明りの電灯の下には、藤村として春樹として写真や手紙などが幼少から晩年に至るまで所狭く貼られて、書棚には少しはげかかった金文字を鈍く光らせて蔵書が並んでいた。あの「夜明け前」の構想が成ったのもここからだと思うにつけ、偉大な文豪がずっと身近く感じられた。幕末の世相をよそに馬籠の本陣を堅持してきた吉左衛門、人々の不安と動揺をもたらす黒船、やがて訪れる近代の黎明を象徴づけるかのような半蔵の結婚。巧みなフィクションに自分はすっかり引っ込まれたが、しかしあの小説における黒船は「夜明け前」にどのような意味で位置づけられるであろうか。一隻の唐人船―それは歴史の大河に比して微々たるものである。だが、あの時において意味をなす黒船は歴史の持つ必然性に負うのであろうか。変転する歴史のその契機は思いがけぬところに潜んでいることを初めて教えられた気持だった。記念堂を出た目に夕陽がまぶしかった。道端を清流が音を立てて流れその透明な溜りにきれいな鯉が泳いでいる藤村のふるさとであった。帰りにもらったスタンプの裏にこんな言葉が載っていた。

血につながるふるさと
心につながるふるさと
言葉につながるふるさと―藤村

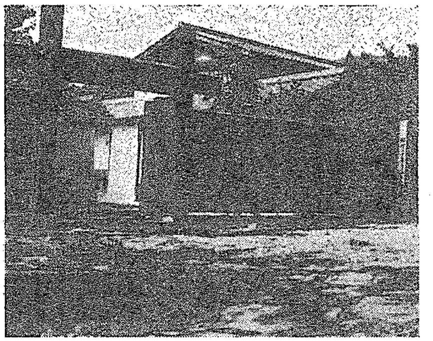
× × ×

翌日の長野の夜は美しかった。権堂通りという通りに面した店舗は全て装飾を凝らしてその美を競うのである。大きな鯱提灯や蛸入道が夏の夜空にふんわりと浮いてその明滅する光の中を人々が指しながら評して行く。宿に帰っても忘れ難い色彩の印象であった。がふと出かけに聞いた兄の話を思い出してその甘美な夢を破られた。

兄は終戦前に学徒動員の例に洩れず長野にいた。軍部の指導で本土決戦に備えて長野の山奥に大きな洞窟を掘り、皇系を維持せんとしたのだそうだ。

空襲に備え頂上から麓にかけ、捕虜、韓国人、学徒の順で穴を掘った。夏の焼けつく太陽の下での重労働。しかも竹の節と節との間を切ってそれにすりきり一ぱいの飯が一日の食糧である。彼らはまだ硬い七月のリンゴをガリガリ噛って飢えをしのいだ。次第に犠牲者が出てきたが、遂に兄の仲間からも広島出身の二人の学徒が倒れた。軍医の診断の結果、栄養失調のために帰郷（学徒には最大の願いであったろう）が許された。皆の無言の羨望の中を欣喜雀躍として故郷の広島へ帰ったのである。そして彼らを待っていたものは八月八日のあの一瞬の閃光であった。彼らにとって何と皮肉な待遇であったことか。そしてすぐ終戦。捕虜は特別仕立ての二等車で学徒は貨物列車の連結機にまでつめ込まれた。兄は幾つものトンネルで全身ススだらけになって帰って来たのである。

自分は兄の話から知る日本の第二の覚醒とあの「夜明け前」との相異を考えてみるのだった。黒船は人を驚愕させてもあの閃光の如く多くの生命を奪いはしなかった。なぜ、かくも多大の犠牲を必要として初めて夜の帳が開かれたのであろう。連綿として続く暗黒の日々の中で学徒達はどう思ってリンゴを握りしめたことか。何を考え何を願って生きたことか。彼らこそ追われ行く家畜の如く、間々として日々を送る人間の姿であったろう。極度の貧窮から聖戦に対する疑惑が、否軍部の独善的なヒロイズムに根本的な精神のよりどころを疑う心がアバンの中にはなかったのか。アプレの自分には理解できぬアバンの誤まった世界観歴史観に基づく狂信的な信条があったように思える。だから若しも被爆しなければ本土決戦に持ち越したであろうし、もっともっと悲劇的惨事を見たであろう。少数の人間の狭い視野で小国の分を越えた試みは同胞を、そしてふるさとをかくも傷つけたのだ。皮相的な思想の爆動に躍らされ、かつ盲従した人間は無意識のうちに歴史への挑戦を企てたのである。遂に歴史は厳しい鉄槌を下し、人間は大きな犠牲を供さねばならなかった。日本の全滅を救った被爆者二十万。その魂を誰が慰め、誰がその罪を負い得ようか。殺戮を経て十四年。歴史のみがその傷を洗い解決を与えてくれるのだ。人為的な所作が自然の歴史の前にいかに無力なるかを思い、全てを放擲して自然に抱擁されたい気持に襲われた。全てを忘却の彼方に追いやるかの如き、この自然の作りなした美味なるリンゴを手にして自分はやっと心の平穏を感じた。口の中で次第に拡がる甘酸いリンゴの味を噛みしめるとき、「自分達は虫ばまれたリンゴではない」とこんな言葉が髣髴と浮かび上がってくるのだった。いつしか長野の夜は深々とふけて、一つ又一つと街の灯りは消えていった。静かに善光寺が見守るうちに闇は全てを抑し包んでしまった。


（島崎藤村記念堂）

先輩通信

意欲を持って職場に

第十二回生　長尾幸美

希望に胸をふくらませて社会に飛び出してから早三年。働く女性の姿を遠くから眺めていたら実に甲斐甲斐しいと感じられていましたが自分がその中の一人になってみましたら、生き甲斐を感じるどころか、反対にただ疲れてそれだけで一日が終ってしまうのでした。学生時代がむしょうに懐しく感じられた頃が多々ありました。ただ与えられた仕事を忠実に尽すという毛頭のみで、その日その日の会社生活を送っていました私には何かものたりないものを感じさせられました。学期試験の前度、軟らかなふとんの中で、さあこれから寝れるぞ、なんて時の気持。また自治会活動で一週間の記念祭が大成功をとげた、こんな感激が何一つその頃の私にはなかったのです。すべてを運命でかたずけてしまっていました時の私には、若さも、ファイトも失われ、ただ楽しかった学生時代が羨しく思い出されてなりませんでした。でも今は違います。今の私には、この悲観的な運命を克服してゆく強さを持っています。職場では仕事の上での先輩と議論をたたかわします。なる程、やはり先輩だなんて、何年間も多々な経験を積んでこられた方の意見につまらない感心をしたり、自分の意見が正しいとみたら、あくまでも反ばっし、長時間にわたって議論し合うときもあります。すると自然に仕事に対する喜びが生れ、今度はその仕事を自分の物にしようと、がっちり四つに組んで寄り切ろうと努力します。職場でのフューマンリレイション、これも仕事の上に難しいものだと思います。どんな社会組織のもとでも、そしてどんな窮屈な仕事でも、やはり与えられたものに忠実に尽し、熱意をもってぶつかり、職場の雰囲気をよりよくしてゆくことが大切だと思います。仕事はつまらないから要領よくごまかしておけばよいという態度をとる時仕事はいよいよ堪へられない苦痛となります。職場は不合理なことや矛盾にみちみちて、私達の働く意欲をもぎとることが多いのです。がしおれた花のようにぐったりした心もあたたかい友情の光にあてられると生気をとり戻します。そして更に多くの友情が広がって職場の不合理や矛盾をなくするために、協調し、闘い、努力してゆく時お互の間に、深い連りを感じ、また明日の希望を求めて多くの人達が手を握ってゆくとき、窮屈な、つまらない仕事でもそれを通して、友情と団結の喜びがもたらされるのです。

今後、貴方達が社会に出られて、貴方の職場がどんな些細な仕事であろうとも、仕事がたとえ窮屈なものでも、職場を愉快にする意欲があれば自分の仕事を愛し、忠実に自分の任務をなしとげるという毛頭で、よりよい職場を貴方達の手で作り上げて下さい。働く女性もやはり自分の力でより高い枝に手をさしのべてゆく努力を忘れないで下さい。

幸にして、現在の私は、入社当時の不安や不満を忘れ、持前の人なつこさで先輩の方々から愛され、楽しい社会生活を送っております。どうか残り少い学生々活をくいなく有意義に送られるよう、大いに望んでやみません。

清水幾太郎著

『論文の書き方』を読む

―執筆恐怖症にかかる―

熊谷俊作

（一）

この書の表題だけみるならば、ある一部の人々、即ち論文というものに平素、関心をもっているものには注目されようが、そうでないものには全々見向きもされないおそれがある。しかし開いてびっくり、読んでびっくり。そもそも清水氏がここに用いている論文というのが問題なのである。「本書で論文というのは差し当り、知的散文というほどの広い意味である。内容及び形式が知的であるような文章のことである。芸術的効果を狙ったもの、即ち小説や随筆とは区別される。この区別は明瞭でなければいけないと思う。……哲学、思想、文化、社会科学の方面における知的散文を中心とする。」と彼はいう。（傍点筆者）また知的散文を書く私たちは詩人ではないと彼ははっきりいう。知的散文と芸術的散文とが混同されて、曖昧なもの、思わせぶりのもの、深そうなもの……つまり、知的散文が正に避けねばならぬものが芸術の名で居直ってしまう例の多いことを彼は嘆く。この嘆きの爆発―彼は書くことは観念の爆発であるという―が本書なのである。更にその基底には、知的散文と芸術的散文との混同が、殊に甚しい日本の現状をみつめつつ、それを西欧的水準にまで高めようとする著者の熱い念願のあることを看過することができない。

従って彼は提唱する。「日本語を自分の外部に客観化し、これを明瞭に意識しなければならない。文章を書く人間は、日本語を一種の外国語として慎重に取扱った方がよい」と。慎重さは形式的なことから、さらに内容的なことに及ぶ。よくいわれてきた「あるがままに書け」とか「思った通りに書け」ということに反対して「あるがままに書くことはやめよう」とむしろきめつける。書くということは、思ったまま、見たまま、あるがままの直観を克服することであるという。そして彼独自の文章論が生まれてくる。書くということは空間的並存状態にあるものを時間的継起状態へ移し入れることである―文章は空間の時間化―と定義する。従って、文章は自然に生まれてくるものでなく、人間が意識的につくるものである。あれもこれもではなくて、一切を捨てようと決心すると、文章の中の攻める部分が明らかになってくる。構想がはっきりしてくる。ところで、日本人は一つのシーンをパッと掴む能力はかなりあるが、シーンとシーンを結合して全体の構造をシッカリ掴み、作りあげることには弱いと彼は指摘する。よくいわれる構想力欠如の問題である。

文章の構想の問題から、つぎは文章の密度の問題に移ろう。彼はE・H・カーの講演の恐るべき密度を称えるとともに、日本の講演の密度の低さをかなしむ。そして、密度を高める方法として、複雑な内容を正しく表現しようとすればするほど、一つ一つの文章は短くして、これをキッチリ積み重ねて行け、とすすめる。事実、彼の文章の一つ一つのセンテンスは割合に短い。今まで長いセンテンスを書き、または読んでいたものには正に革命的である。さらに密度を高める方法として、短篇―彼は一千字の世界（原稿二枚半）で修練したと言っている―からはじめて長篇に進めと教える。

（二）

さて、このような著作は、清水氏ならでは、とうていできないことだと私は思う。清水氏のことは私は知らないが、本書によって知り得るところからすれば、数か国語に通じ西欧的なものをも、よく身につけたその教養、大学時代より文章修練をつみ、またその後、新聞へ執筆するなどの豊かな経歴、当代一流の文章家といわれるその生来の素質、全く恵まれたこれら条件のもとにはじめて可能なことである。一読して、よく痒いところへ手がとどき、灰汁が強い位にツボをおさえていて、それで決していやみを興えないのは、正に当代一流の文章家といわれるに恥じない。こと日本の文章に関することであるが、国文学者や国語学者ではとてもこれだけのことは書けないと思う。たとえ書いても、これだけアピールするものはないのではなかろうか。

しかし、よく考えてみれば国文学者や国語学者にこのようなことを求めること自体が、まちがっていたと思う。清水氏も言っているように、本当に文章を書くとなると、学校教育の枠の外で、即ち自分自身で修業しなければならないのである。また「論文の書き方」などという専門学もないわけである。しかし現実は、誰もが文章を上手に書きたいことを念願し、このような本の出るのを渇望していたといわなければならない。正に本書はありがたい本である。

殊に「思索なき弁論は無意味であるとともに、発表（表現）なき思索も無意味である。」ということを最近、痛感している私にはそのありがたさは格別である。思索されたものは、文章なり、弁論なり、または行動の形式によって吐露さるべきではないだろうか。ただ心中にモヤモヤと往来させているような思索では踏切りがないと思う。先述の爆発である。読むことは受動的であるが、書くことは能動的である。清水氏も「表現を伴わぬ理解はまだ真実の理解であることができない。」と述べて、現在の学校教育では享受ばかり多くて、表現が少いといっている。私はこの書を読んでから、文章を書くのが恐くなった。執筆恐怖症にかかっているのもともとこの文は、皮肉にも最近の読書感想をとの注文づきで出版部より求められたものであるが、気がすすまなかったのである。「私の文章を読んで、これしか書けないのか」と清水氏に笑われても仕方がない。文体の改善とは思想の改善のことであるといわれるように、しばらくの時間を必要とされるのだろう。ひろく学生にこの書の一読をすすめたい。

クラブ Sketch

より良い劇を

演劇部

現在部員数は十五人、六月より記念祭に上演される劇と取りくんでいる。最初二本上演される予定であったが、都合により一本だけ上演することになった。今年は昨年より少し早めに記念祭に上演されるべき劇ととりくんだので、七月に装置を作り、八月は練習をなくした。一年生の部員にとって入部して最初の劇にあたるので勝手がわからず少しめんくらったようではあるが、上級生のよき指導によりうまく切り抜けているようである。しかし九月に入ってからの練習ぶりは八月中休みをとったためか、だらだらとして熱意が欠けているように見えた。このような様子はついには演出の注意をうける結果にいたり、わずかの時間ではあったが練習のあい間に時間をとり、その時間を話し合いの時間とし、だらだらする原因を追求したためか、その翌日からの練習には、昨日まで見られなかった雰囲気が漂い始めたようである。演劇部だけではなく、どのクラブでも、又、社会に出てからでも話し合う時間を持つということは大切であって、下級生が上級生に対する不平、不満を言い合ってこそ、お互いが仲良くやっているようである。記念祭を目の前にして部員は、こまねずみのように動きまわっている。なにしろ、部員が少ないので一人一人にかかる負担は重くなる、しかし誰も苦しいとはいわず、ただ歯をくいしばって頑張っている。劇を作る過程が苦しければ苦しいほど劇のできあがった時の喜びは大きく、それを楽しみにして部員全員が一歩、一歩、力強く進んでいっている。われわれとして、表面の上演される劇そのものを見るだけではいけない。